
命脈の石

三条龍樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命脈の石

【Nコード】

N5727F

【作者名】

三条龍樹

【あらすじ】

ひきこもり中年に母親が見つけてきた仕事とは！？35歳ひきこもり男性による、異世界自活迷走記。おまけに、何故か若返ってます。

蟻と魔法少女

おかしい。

いつも通り部屋でぐうたらしていたはずなのに、どういうことだ？
気付けば、いつの間にか外にいた。

冷たい夜気に頬を撫でられ、ブルリと身を震わせた。

「ここは、一体どこなんだ？」

呟いてみるが、答えをくれる者はいない。

それもそのはず、ここはどう見てもいつでも安らぎをくれる家ではなく、木々が生い茂っている森だ。

今まで、自室にいた筈だ。

年季の入ったひきこもりの俺が、自ら外出するなんて有り得ない。

「いててて。って、木の根っこを枕にしてりゃ、そりゃ体も痛くなるよな」

大きな木の下から体を起こした俺が、異変に気付いたのはその時だった。

「なっ、何!？」

体に馴染んだ、最早皮膚の一部と言っているいいスウェットが妙に大きい。

どういうことだ？

スウェットが大きくなるなんてことはないから、当然俺が縮んだと考えるのが妥当だ。

まさか……な。

怖々と視線を徐々に下に移していく。

まず、30歳越えてから出てきた腹の部分が引っ込んでいる。それだけなら痩せたと喜べたんだが、スウェットの袖から手が出ていない。

スウェットのズボンの紐が食い込んでいた腹の部分は、今では緩くてすぐに脱げてしまいそうだ。

「何でだよ……」

現実を受け入れるのを、脳が拒否している。

何故か、35歳のおっさんだった自分が子供になっているらしい。その場で立ち尽くして考えるも、理由なんて分かりはしなかった。

だが、俺には悲しんでいる時間も有りはしなかった。

ギシシシギシユシユシユ

異音を立てて現れたのは、大きな蟻だった。

自分が縮んだから、蟻が大きく見えるのか？

違う。

この蟻の大きさは異常だ。

どう考えても、3mは有りそうな巨大蟻なんて聞いたことがない。

大きさの違いからか、木の陰になっているからか、巨大蟻はまだ俺に気付いていない。

「……」

逃げ場を、素早く模索する。

木の上に登ろうか？

いや、ダメだ。

この蟻には、透明な羽まで生えている。

飛んで来たりしたら、今度こそ逃げ場はない。

普通の蟻だって、蟻酸と言う酸を吐く。

もし、この大きさの蟻に酸なんて吐かれたら、俺の生涯は即座に終了だ。

蟻の方を向いたまま、じりじりと地面をするように後退して行く。
いいぞ、そのまま俺に気付くな。

一步一步、蟻を睨んだまま後退して行くと、大きな木の根元に躓いた。

「うわっ！」

幸いにも地面に手をつくことで、顔面を強打することは避けられた。

ああ、こんな時だけは運動してこなかった自分を恨むぜ。

ギシュシュシュシュ

巨大蟻は俺を見つけて、喜びのあまり目を細めたように見えた。
絶対絶命のピンチに、心臓が早鐘を打つ。

ドクツドクツドクツ

心臓が口から飛び出すんじゃないか？

そんな錯覚が起きるほど、心臓がドキドキしていた。

鼓動に合わせるように、ポケットに突っ込んだまま忘れていた石が熱を発してくる。

「このまま、ここで死ぬのだけはゴメンだ」

いつでも、何かを諦めてきた。

だが、自分の命を放棄するなんてことは出来ない。

地面に落ちていた拳大の石をいくつかと、木の棒を拾うと俺は蟻に向かって走り出した。

ギシュアッ

巨大蟻も走り寄って来る俺に、自分の腕を振り上げた。

ドスッ

蟻の攻撃で地面に大きな穴が開いた。

ふう、危ない危ない。

そう思いながらも軽快なステップで、蟻の攻撃を避ける。

体が驚くほどに軽い。

長年の不摂生に寄るつけがなければ、本来はこんな風に動けたのか。

ある意味感慨を持ってちょこまかと動く俺に、蟻が痺れを切らして右に左に攻撃し出した。

「おいおい、切れるなよ」

ひょいっと避けた先に、蟻の顎があった。

不味い！

即座にバックステップした瞬間に、蟻が酸を吐いた。

ジュウウウウッ

酸が落ちた地面が煙を上げている。

ヤバイ。あんなものに当たったら、即死確実だぜ。

「思ってた以上に凶悪だな、蟻ちゃん」

そろそろ、反撃させてもらおうか。

次々に酸を吐き出してくる蟻の口目掛けて、渾身の力で持っていた石を投げつけた。

ゴギユッ

威力のある石を顎に当てられた蟻の顎が陥没した。

「よし、命中！」

顎陥没させるなんて、俺の投球も捨てたもんじゃないな。

俺の攻撃を受けて怒り狂った蟻は、上体を起こしてたくさん足で攻撃してきた。

ドスドスドスドスッ

アチコチに穴を開けている蟻に、棒を野球のバットのようにつくって余裕の笑みを見せる。

「ふっふっふっ、君が腹を見せるのを待っていたのだよ」

言い終わると持っていた石を上に向けて、落ちてきた石を思い切り打った。

カキーンッ

「ホームラン！」

ギギヤアアアアアッ

俺の打った石の球は、吸いこまれるように蟻の腹に付いていた緑の石を打ち砕いた。

ドウツと思いい音を立てて倒れた蟻は、どうやらお亡くなりになったようだ。

「俺も死にたくなかったんだ。許せよ、なぐむ。」

蟻の冥福を祈って、両手を合わせていると歓喜の声が聞こえてきた。

「凄い！ 君、凄いよ！」

突然現れた少女は、俺の前に走り寄って来ると急に両手を握って叫んだ。

「こんなに小さいのに、ギジュウを倒すなんて嘘みたい！」

「……魔法少女のコスプレか？」

興奮している少女の着ている物は、どう見てもどこぞの魔法少女のようだった。

金髪碧眼の美少女なのに、コスプレ魔法少女なのか？
痛いです。

それに短いスカートが、おじさんには目の毒です。

「まほーしようじよって何？」

彼女はそんな言葉は聞いたことがないのか、可愛らしく小首を傾げてきた。

うむ、外人だから聞いたことがないよな。

彼女が日本語を話していることに気付かず、俺は少女に言った。

「いや、気にしないでくれ。すまないが、ひとつ尋ねたいんだがいか？」

「え？ 何？」

「ここは一体どこなんだ？」

「は？ ……って、ええ！？ 記憶喪失なの！？」

俺の長きに渡るひきこもり生活は、蟻との戦いを契機に終わりを告げた。

悩めるおかに愛の手を

「まったく、あのダメ息子をどうやって立ち直らせようかしら……」

パート先から帰る途中、女は悩みの種であるダメ息子を思ってため息をついた。

父親である自分の旦那はあてにならない。

お前が甘やかすから、悪いんだろう。

前に相談した時は、その一言で終わりだった。

まったく、愚痴ぐらい聞いてくれても罰は当たらないのに！

「はあ、どこかにひきこもり歴5年の無職の男を雇ってくれる、夢のような就職先は落ちてないかしら……」

本気で落ちているかと思っているわけではないが、10円玉でも落ちていられるかもしれないと半ば自棄になって地面を見つめて歩いた。

「あっ！」

その瞬間、何もない所で躓いた。

あゝあ、年って嫌ね。足までガタが来たみたい。

苦笑を浮かべながらも、次に来る衝撃を覚悟して目を閉じた。

しかし、いつまで待っても地面に激突することはなかった。

「大丈夫ですか？」

下手をすると、息子よりも年の若い美形の男性に抱えられていたからだ。

ハーフなのだろうか？

薄い色素の茶色い髪と瞳に、10数年ときめいたことのない胸が弾んだ。

「だ、大丈夫です。ありがとうございます」

焦って男性の腕から逃れると、赤くなった顔のまま勢い良く頭を下げた。

ああ、素敵。

まるで、韓流ドラマみたい。

自分がもう10歳若ければ、この人と恋に落ちたかもしれないわね。

もう二度と見られないかもしれない美形を前に、女はうつとりと助けてくれた男性を見つめ続けた。

「怪我がなくて何よりでした」

男性が微笑んで立ち去ろうとした瞬間、とっさに女は自身も思いがけない行動に出た。

「あっ、あの！ お礼にそこでお茶でもどうですか？」

指差した先は、近所でも評判のお洒落な喫茶店だった。

わ、私ったら、一体何を？

自分の言った言葉に、女は今更ながら動揺していた。

会ったばかりの人なのに、この人と一緒にいたい。

でも、断られたらどうしよう。

まるで、初恋をした乙女のような女に、男性は優しく微笑んで言った。

「よろしいのですか？ そのようなお気遣いはしなくても……」
「い、いえっ、それでは私の気がすみませんから！」

慌てて言った女の言葉に、男性は上品にクスリと笑った。
ああ、どうしよう笑顔まで素敵。

もしかしたら、韓流スターより素敵かも。

呆然と自分を見つめる女を促すように、男は喫茶店に向かって歩き出した。

「そうですか？ では、少しだけお茶でもしましょうか」
「ええ、では行きましょう！」

赤くなった顔を誤魔化す為に、女は大股で店へと歩き出した。
途中で追い抜かれた男性は、後を追いかけてはくそ笑んでいた。

繁盛している割に、喫茶店の席はいくつか空いていた。

「あ、ここです」

女が手を上げると、男性がすぐに女の前の席に座った。

「何を頼みますか？」

「では、私はコーヒーをお願いします」

「じゃあ、私もコーヒーにしようかしら」

注文を済ませコーヒーを待っている間に、女は自分のことを男性に語っていた。

どんな話でも嫌な顔をせずに話を聞いてくれる男性は、最上級の話相手だった。

時間を忘れて会話してしまったのは、話し相手が美形の男性だったからかもしれない。

コーヒーが冷ちゃったけど、それだけの価値はあるわ。

頼んであったコーヒーはいつの間にか冷めた状態でテーブルに置かれていて、経過した時間を感じさせた。

女が感動したのは、男性がにこにこ話を聞いてくれるだけではなく、それとなく同情をしてくれているからだ。

ああ、なんて素晴らしいの！

パート先の話から、ダメ息子の話まで何でも聞いてくれるなんて！感動している女は、次第に話題が自分のダメ息子に移っていることに気付かなかった。

「ひきこもりなんて、大変なんですよね」

「ええ、そうなんです！ 不景気だから、就職先も見つかりませんし……」

女の言葉を聞いた男性は、自分の懐を探って一枚の紙を取り出した。

取り出した名刺には、『（株）リライフ 取締役社長 結城進』と書かれていた。

「これも何かの縁です。よろしかったら、息子さんをわが社に預けてみませんか？」

本来なら警戒する話だが、女にとって男性はいつの間にか信じるに足る人物になっていた。

「でも、いいんですか？」

「ええ、わが社ではひきこもりの方々の、立ち直りをサポートして

おりますから。……ただ」

「ただ？」

「息子さんには二度と会えなくなります、よろしいですか？」

その言葉には、流石に女も目をむいた。

いくら可愛くなくろうが、いくらひきこもりだろうが腹を痛めて生んだ我が子なのだ。

「二度と会えないってどういうことですか？」

「会えないと言っても、これは息子さんの為なんです」

「…は？」

「親元に近い場所にいると、すぐに元のひきこもりに戻ることになる。ですから、我々は彼らに海外で働いてもらうことにしたんです」

「か、海外？」

「ええ、パスポートも会社が管理致しますから、勝手に家に戻ることも出来ません」

「でも、そこまでしなくても……」

我が子の辿る道を考えて、女は少しやり過ぎではないかと思っていた。

「いいえ、こうする必要があるんです。いいですか？ このままでは、息子さんは一生ひきこもりですよ。息子さんの為を思うなら、こうしなければいけないんです！」

一生ひきこもりなんて、冗談じゃない。

断言された言葉を聞いて、女もその気になり始めた。

「そ、そうですね。海外なら立ち直ってくれるかも……」

「それに息子さんがいなくなれば、あなたも第二の人生を歩き出す

ことが出来るじゃないですか」

第二の人生…か。

気の利かない旦那と離婚して、若い男と再婚するなんてことも…。

滅多に見ることが出来ない美形に両手を握られた女は、即決した。

「分かりました。ウチの息子をよろしくお願いします」

こうして、件の息子は強制的に脱ひきこもり作戦に引きずり込まれることになった。

ついでに女と男性が密会している噂が流れたが、それも数日もしない内に消滅した。

「まあ、あそこの奥様に限って、男と密会なんてありませんわ!」
「そうですわね。あそこの奥さまは、鎌倉の大仏様にそっくりですものね」

鎌倉の大仏様は、男性との密会がありえないらしい。

マダロとカニが怖い

その日、母親の梅子は帰宅するなり、上機嫌で俺の室内に踏み込んできた。

物が散乱している室内を、あらゆる物を踏み潰して俺の前に立った。

ああ、その足の下にあるのは、この間買ったばかりの限定品プラモ……。

恨みがましい視線を受けても、息子のじっとりした反応に慣れる梅子はどこ吹く風だ。

ひきこもりにとって、自室は言わば最後の砦である。

極力早く出て行つて欲しい。これ以上、何かを破壊される前に。

俺のささやかな希望を感じ取ることもせず、梅子は何かのパンフレットを興奮した様子で差し出して来た。

「聞いて、義明ちゃん！ いい話があるのよ！」

「何だよ……」

何かとても嫌な予感がする……。

母親にとってのいい話とは、すなわち俺にとっての悪い話と同義だ。

「それが嘘みたいな話なの！　なんと、義明ちゃんを雇ってくれるつて言うの！」

「へえ、今時奇特的な会社もあったもんだね」

「そうなの！　紹介してくれたのは今日偶然出会った人なんだけど、それはもう親切で……おまけにとっても美形なの」

ああ、それでか……。

息子は大仏似の母親梅子の生態を、良く理解していた。

三度の飯より、美形好き。

それも、韓流ブームに乗って、韓流スターの追っかけをしているほどだ。

息子の全てを見抜いているような視線を受けた梅子は、咳払いをして話し出した。

「う、ううん。それでね、明日から義明ちゃんには、海外に行ってもらうから」

「はっ……？」

いきなり海外とはこれ如何に。

英語も喋れない上に、生来口下手な俺になんて無茶を言うんだ。

驚いている息子を見て、流石に悪いと思ったのか梅子はもしもじしながら言った。

「……しかも、海外では全てを会社側が管理するから、義明ちゃんはまだ戻って来れないわ」

「何だよ、それ？ 戻って来れない会社なんて、聞いたことないぞ……」

未だに奴隷制度なんて物が、この世にあっただろうか？

思わずそんな馬鹿なことまで、考えずにいられなかった。

「でもね、大丈夫よ。結城さんの会社は、海外でたくさんのひきこもりの立ち直りを支援しているらしいの」

「でも、戻れないのはやり過ぎだろ？」

当然の義明の苦情に、梅子は開き直った。

「そうよ？ だから、何か文句あるの？」

「い、いや……文句と言うか……」

「仕方ないでしょ！ 海外でも行かなければ、一生ひきこもりのままよ！」

「でも、海外でも出社せずに、ひきこもる可能性があるじゃないか」

息子が反論したのが許せなかったのか、梅子は部屋に特大サイズで飾ってある息子の少年野球で優勝した写真に首をぐきつと曲げた。

「ぐげっ！」

「見なさい、あの輝ける日々を！ そして、あなたが一番活躍していた日々を思い出しなさい！」

見たくても見れなかった。

梅子に無理矢理違う方向に捻じ曲げられた首が、微妙に締まっていた。

輝ける日々を思い出す前に、息子は違う場所に昇天しかけている。泡を吹いている息子に気付いた梅子は、誤魔化すように腰に手を当てて雄々しく言った。

「義明ちゃん、人生の頂点だったあの頃を思い出すのよ！ チームを優勝に導いた奇跡の右腕を！」

小学生が人生の頂点なんて、あまりにも酷い言葉だ。

しかし、当人にとってもそれは事実なので、否定するほどのことでもないらしい。

今一番重要なことは、どうやら強制的に働かされるらしい就職先についてだ。

「遠洋マグロ漁船か……北海での蟹漁……」

思いつく言葉がそれしか出て来なかった。
おそらく、就職した何人かが海の藻屑と消えたのだろう……。
どうにか回避する方法を考えなければ、俺も同じ運命を辿ること
になりそうだ。

深刻に悩む義明をよそに、梅子は一人弾む足取りで部屋を出た。

「ふふふ、明日は何を着て行こうかしら」

大仏は何を着ても同じだ。

むしろ、裸で行け。

思わず口に出そうになった言葉をぐっと飲み込んだ。

もしかしたら、このまま上機嫌なら恐怖のマグロまたはカニを回
避できるかもしれないからだ。

もう、マグロもカニも食わない……。

侵入者と妙な石

母親の梅子が部屋を出て行っても、思考回路は半分停止した状態だった。

日課であるネットゲームに手を伸ばすこともなく、万年床にゴロリと横になった。

「はあ、明日のことを悩んでも仕方ない。今日は早く寝よう……」

寝ると言っても頭の中をマグロと蟹が舞い踊っていて、いつまで経っても眠くならなかった。

天井の染みを睨みながら考えているのは、明日からの過酷な労働である。

「漁船なんか、どう考えても無理だ」

体力には少しも自信がない。

母親が言う通り、人生で一番運動神経が良かったのは小学生の頃だ。

それ以降中学に入ってから、市販ゲーム機に夢中になって、どんどん視力が落ちていった。

当然、運動をしなくなった為、体力も急激に落ちた。

俺もそうだが、ひきこもりなんかを漁船に乗せても、体力がないから使い物にならないんじゃないだろうか？

考え事は、突然の闖入者に遮られた。

侵入口は義明の部屋の窓だと、はためているカーテンで分かる。

「……すまない……無断で侵入した無礼を許してほしい……」

男の衣服も格好も異様だった。

顔や髪形は普通の日本人なのに、まるでファンタジーRPGの世界から現れたような格好だった。

ご丁寧にも、剣らしき物まで持っている。

「えっ、コスプレ大会？ 誰だよ、あんた……って、血が出ているじゃないか！ すぐに手当てを」

「……そ、それより……頼みを……頼みを聞いてくれ……」

突然の侵入者に驚いたものの、すぐに侵入している男が怪我をしていることに気付いた。

まずは手当をしよう。

警察を呼ぶのは、その後でも出来る。

不審者だろうが何だろうが、俺の目の前で死なれるのだけは嫌だ。

「分かった。話を聞くから、横になってくれ」

話を聞くと聞いた侵入者は、ホッとしたように微笑んだ。

「……良かった……ゴホッゴホッ……これで……使命も」

侵入者の腹からは、おびただしい大量の血が出ていた。

酷い傷だ。

だが、まだ間に合うかもしれない。

顔色を失って紙のように白い男の顔色を見て、即座に救急車を呼ぼうと携帯に手を伸ばす。

義明の携帯に伸ばした手を重症の男が止めた。

「止めるな！ 死にたいのか？」

「……いや……いいんだ……ゴホッ、俺はもう助からない……ゴホッガハッ」

咳きこむのと同時に、男は血の塊を吐いた。

「そんな諦めるようなこと言うな！ すぐに、救急車を呼ぶから！」

「……それより……これを君……に……」

「これはビー玉か？」

男が手渡して来たのは、小さなビー玉のような赤い玉だった。

そのビー玉は、何故かドクリドクリと脈打っているような感触を伝えてきた。

「そ、それで……マー……さま……を……頼む……」

「お、おい！ おい、死ぬな！ 死ぬなよ！」

やる気のないひきこもりの俺に、何かを頼まれても困る。

しかも、マー様って誰だよ。

……それより、今気付いたんだが、このままこの人が死ぬと俺が殺人犯みたいじゃないか？

死にかけている男の前でそう思っていた俺の考え事は、またも遮られることになった。

「チッ、先手を打たれるなんて、不愉快だな」

「おいおい、また侵入者か？」

千客万来の俺の部屋に現れたのは、ライトブラウンの髪と瞳の美形の男だった。

人を蔑むような瞳と態度がいけ好かない。

美形なんて皆好きにはなれないが、こいつの第一印象は最悪だ。

「君にはそれは分不相応な代物だ。返してもらおう」

「返せも何も、これはこの人の物だ。」

血塗れの男を一瞥すると、美形男はふんっと鼻を鳴らした。

「そいつは盗人だ。元々それは、我々の物だったんだ」

「証拠はあるのか？」

「必要ない」

理不尽な言葉を言い切った美形男は、隠し持っていたナイフを俺に向けた。

「さあ、それをこちらに」

美形男が一步踏み出して来ると、俺の前に血塗れの男が剣を杖にして立ち上がった。

「……に……逃げろ……ゴホッ」

「でも、あんたを置いて行くのは！」

「いいから……逃げろ！」

叫んだ男は、美形男に剣を抜いて斬りかかった。

怪我人の男が気になったのもあるが、運動神経のない俺はとっさに逃げるなど出来なかった。

「無駄だよ」

ドスツと鈍い音を立てて、美形男のナイフが男の腹に深く埋まった。

死んだ……のか……。

安らかとは言い難い男の顔を見て、俺はにわかに死の恐怖を感じていた。

嫌だ。

まだ、死にたくない。

ドクリドクリドクリツ

強く思ったのに呼応するかのように、ポケットに入れていた石が熱くなってきた。

美形男がズリとナイフを男の腹から抜くのを見て、更に強く思った。

【死にたくない】

その瞬間、眩い光が部屋中に溢れた。

ポケットの中の石は、何故か物凄い熱を発していた。

「チツ、石を使ったのか」

美形男の悔しそうな声が聞こえた気がした。

ざまあみやがれ。

意味も分からずそう思ったのを最後に、俺という存在は世界から消えた。

マグロと蟹から逃れられたのだけは良かったが、これがこの先の運命を決める出来事になるなんてこの時は思ってもみなかった。

触覚が欲しいんです

魔法少女と話している内に、ここに来た経緯を完全に思いだした。どうやら厄介事に巻き込まれたようだ。

ファンタジー小説に良くある「異世界トリップ」してしまったなんて、冗談でも笑えない。

三流映画にも出て来ない巨大蟻が、異世界トリップなんて物を俺に確信させた。

ポケットの上から、そっと血塗れの男に渡された石を押さえた。恐らく、この石が関わってるのは間違いないだろう。

まったく、面倒な話だ。

どうせ渡すのならひきこもりの俺じゃなく、世界一の強い奴か、世界一の頭のいい奴に渡せばいいんだ……。

俺の言葉に応えるように、血塗れの男の苦悶した顔が思い浮かんで来た。

……面倒臭いが、命を掛けて守られたんだ……。

この石はあんたに代わって、俺が必ずマー様とやらに届けてやるよ。

決意した俺が余程悲壮な顔でもしていたのか、慌てたように少女は話しかけてきた。

「ちょ、ちよつと！ 君！ 君！ 大丈夫？」

「あ、ああ。問題ない……」

「ここはロズ村の近くの森だよ。何か思い出せそう？」

「いや、残念ながら自分が戦災孤児だと言う以外は、何も覚えていない」

戦災孤児なんて丸っきりの嘘だが、彼女はそれを信じたようだ。恐らく、この世界では戦災孤児など珍しくないのだろう。

あつさり信じてくれたようで、ホッと胸を撫で下ろした。

「そっか、困ったね……。あ、君の名前！ 名前も覚えてないの？」

「……俺の名前は堺義明だ。」

「……ヨシユア……キ？ 珍しい名前だね！ 私はプリム・リール、ロズ村に住んでるんだ」

しまった！

名前を名乗ってから、失敗に気付いた。

石を狙っている連中は、俺の名前を知っている。

偽名を名乗るべきだったのだ。

これから、この石を狙ってくる者との戦いになるだろう。

それに彼女を、巻き込むわけにはいかない。

「違う。俺の名前は『ヨシユア・キー』だ」

「ヨシユア・キーね、覚えたよ」

ネーミングセンスがないのは承知の上だが、そのまま過ぎたような気がしないでもない。

まあいい。これからは、ヨシユアと名乗って行こう。

「所でプリムはこんな夜に、一人で何故森に来たんだ？」

男の俺でも恐ろしく感じ程なのに、プリムは平然としている。

それとも、異世界では夜出歩くのも普通なのか？

「えっへっへっ、実はヨシユアの倒してくれたギジュウの触覚が欲しかったんだ」

「触覚なんてどうするんだ？」

「冒険者ギルドのお仕事で必要だったの」

そう言って彼女が取り出したのは、羊皮紙に書かれた依頼書らしき物だった。

覗きこんで見ると、何故か読むことが出来た。

それも元来のこの世界の文字の上に、字幕スーパーのように文字が浮かんで見える。

便利なことこの上ないが、これだと文字を書くことは出来なさそうだ。

「ほら、ここに色々な素材を集めるように書いてあるでしょ？」

「確かに書いてあるが、他の物はいいのか？」

「じゃーん！ 見て、他の物は集めてあるの！ 一番大変な物だけ後回しにしたんだ」

毒々しい色をしたキノコ、無色透明な羽根、良く分からない黒い塊。

プリムが見せてきた袋の中には、様々な得体の知れない物体が入っていた。

「じゃあ、早く採取したらどうだ？」

「……………」

黙ってギジュウを見た彼女は、半泣きで首を振った。

そして、何故か俺の両手を握って懇願してきた。

「お願いヨシユア君！ いや、ヨシユア様！ 私の代わりにギジュウの触角を取って来てー！」

「ああ、分かったよ」

誰にでも苦手な物はあるが、彼女の場合それがギジュウだったの

だろう。

黒くてツルツルしている表面が、違う虫を連想させる。考えるな。ゴの字は俺の天敵だ。

スタスタとギジュウに歩み寄った俺は、頭の上の触角を握ると思いい切り引っ張った。

ブチッと千切れた触覚は、見事に根元から取れて長い棒状の触覚を手に入れた。

「はい」

「あ、ありがとう……」

渡された触覚と俺とを交互に見て、プリムは俺の腕を掴んできた。何だ？ また頼みごとか？

「おかしいな？ 普通の腕だね？ 強化魔法も使っていないのに、何で素手で触覚を採取することなんて出来るの？」

「まあ、普通の奴より怪力なんだろう？」

「凄いなあ、ヨシユア君が冒険者になったら、なんか負けそう」

「冒険者……か……」

それも選択肢の内ではある。

どうにかして金を稼がないと、明日の路銀もない状態なのだ。

「プリム、冒険者は何歳からなれるんだ？」

「うーん、大体14歳くらいかなあ？」

「ということは、プリムは14歳以上だったのか……」

大体、今の自分と同じ歳だと思っていたのに……。

プリムは急に不機嫌になって、俺の後頭部をゴインツと殴り付けた。

流石冒険者なだけあって、中々の威力だ。

「痛い！」

「ふんだ！ 私はもう成人した16歳の女の子なんだから！ これからは、お姉ちゃんって呼びなさい」

「謹んでお断り致します」

「もうっ！ 何よ、ヨシユア君の馬鹿！」

怒ったプリムは、凄く早さで歩き出した。

目視できるギリギリの範囲まで行ったプリムは、急に振り返って俺を見た。

「早く、ついて来てよ！」

「え？ ついて行っていいのか？」

「……行く所ないんでしょ？ 触覚のお札に泊めてあげる」

「すまない……」

頭を下げた俺の元まで引き返してくると、プリムは顔の前に人差し指を立てて言った。

「そこは謝る所じゃないでしょ？ ありがとうってお札を言う所なの！」

「あ、ありがとう」

「よろしい」

こうして、俺はプリムの家に世話になることになった。

それにしても、この石はどういう力を持っているんだろうか？

ポテトもご一緒にいかがですか？

客が入って来たのを確認した途端、自然と顔が笑顔になった。
楽しいわけではない。

店主の教えの賜物である。

表面の埃を拭っていた商品を棚に戻し、接客モードになった俺は
カウンターのの中に入って頭を下げた。

「いらっしやいませ、本日は何をお探しですか？」

尋ねながらも、客の様子をうかがった。

客はどうやら腕の立つ冒険者のようだ。

分厚い甲冑についた傷で、いかに激戦を潜り抜けてきたのが分かる。

「へえ、今日は坊主が店番か？いつもの婆さんはどうした？」

「はい、生憎店主は持病が悪化いたしました」

店の奥にある私室の方をチラリと見た俺に、男は腕組みをして頷いた。

どうやら、店主と顔馴染みらしい。

「だから、今日は孫が店番か」

「いえ、孫ではなくただの店員です」

「ほう、子供なのに感心な奴だ」

「そんなことはありません。単に生活費を稼ぐ為ですから」

俺の言葉を聞いて、男は大げさに両手を広げて見せた。

洋画等で良く見る、オウマイガッってポーズだ。

異世界とは言え、外人さんは流石に様になる。

「俺がお前位の時は、親の手伝いが精々だったぜ。よし、今日は坊主の為にも奮発するか」

奮発するか、その言葉確かに聞いたぞ。

客に見えない角度でニヤリと笑った俺は、差し出された傷薬を見て別の商品も差し出した。

「傷薬5個ですね。傷薬と一緒に化膿止めもいかがですか？」

「はは、中々商売上手だな。じゃあ、それもくれ」

傷薬5個に化膿止め5個を一緒にして、冒険者の前に置いた。
当然、別の商品も並べて見せた。

「はい、ありがとうございます。ついでに毒消しもお持ちになった方が良いでしょうが」

「あ、ああ。じゃあ、頼む」

傷薬5個、化膿止め5個、その隣に毒消しも5個並べた。

冒険者の顔を見ると、戸惑っているのが分かる。

だが、奮発すると言ったからには、奮発してもらわなければ悪いではないか。

「良かったら、解熱剤も買いませんか？」

「おい、もういい加減にしてくれ！」

堪りかねた冒険者が叫んだ。

誰がこの程度で帰すものか。

某ファーストフードのスマイル0円精神で、一つでも多くの商品

を売りさばいてやる。

俺がこんなになめつい真似をしているのは理由がある。

5日前プリムの家に世話になった時、記憶喪失の振りをしてプリムとプリムの親父さんを質問攻めにした。

それによると冒険者になるのに資格は要らないが、年齢が14〜5歳からでなければならぬらしい。

本当はこの世界の成人の16歳に達してからだったらしいが、14〜5歳の登録希望者が多く年齢制限を下げたのだと言う。

体が子供に戻っている俺には、それでも高いハードルだ。

この体がいくつなのかは、部屋に飾ってあった写真を思い浮かべると大体推察できる。

どうやら、少年野球で活躍していた当時に戻っているらしい。

巨大アリと戦った体のキレなどからもそうだろうと確信した。

今の俺の年齢が小学3〜4年生くらいだとすると、大体10歳〜11歳といった所だ。

いくらサバを呼んだ所で、冒険者登録は出来そうにない。

ガツクリと肩を落とす俺に、プリムが何かを思いついたように言った。

「そうだ！ 君は学術都市にある学園に行けばいいよ！」

「学園？ 何かを教える所なのか？」

「うん、戦技や魔法なんかを教えてくれる学園なんだよ。一旦入学しちやえば、後は卒業するまで寮生活だから行く所がないならいいと思うよ」

ほう、それはいいかもしれないな。

何より、行く所がない自分には何かを学べてそこに住めるなんて、嘘みたいな好条件に思えた。

プリムに学園がある場所を尋ねようとする、先にプリムの親父さんのガイラムさんがプリムに尋ねた。

「おい、プリム。この子が本当にあの学園に入れると思うのか？」

「お父さん、大丈夫だよ！ ヨシユア君は一人でギジュウを倒せる位強いんだから！」

「……そうか、ヨシユアはそんなに強いのか。それなら、入学出来るかもしれん。だが……」

そこで言葉を切ると、ガイラムさんは腕組みをして黙りこんだ。

何だ？ 入学するのに、何か資格でもいるんだろうか？

「何ですか？ 気になるから、言ってください。」

俺が先を促すと、眉間にしわを寄せたまま唸り声で言った。

「ヨシユア、入学金は支払えるのか？」

「……………」

「……………」

プリムと俺は、顔を見合せて黙りこんだ。

入学金か、確かにそれだけの好条件なら必要だろう。

聞いたところによると、それはこの世界でもかなりの高額だった。

まあ、頑張って地道に稼ぐしかないか。

「すまん、我が家にはそれだけの余分な財産などなくて……」

「ゴメンね、ヨシユア君」

何故か2人は、すまなそうに俺に謝って来た。
頭を下げる2人に、俺は慌てて言った。

「とんでもない！ そんなことまで人に頼れませんよ！ 俺は自力で入学金を稼ぎます」

「……ヨシユアは子供なのに偉いな。プリムも少しは見習って、親に心配をかけないように冒険者など辞めたらどうだ？」

自分に矛先が向いたプリムは、俺の両手を握りしめて言った。

「どこかでお手伝いとか探してないか、明日から探してあげる！
頑張ろうね、ヨシユア君！」

「あ、ああ……」

こうして、プリムと村の中を探した結果、薬屋のジェーンさんの店で店番を頼まれるようになった。

店主のジェーンさんは高齢で、店番をするのが最近辛いらしい。
村の規模はかなり大きいので、薬の需要は多いようだ。

閑古鳥が鳴いているような店なら店番なんて必要ないだろうが、
村の中で唯一の薬屋ということもあってジェーンさんの店は繁盛していた。

店主のジェーンさんはかなりのケチで偏屈な人間だったが、俺とは非常に気があった。

俺が某ファーストフード店のスマイル0円精神で、商品を積極的に売りさばくのを見て気に入ってくれたらしい。

ジェーンさんは俺の様子を見ていて、ある日こう言ってくれた。

「ヨシユア、そろそろここに住居を移してはどうだ？」

「ありがとうございます。プリムの家に、ずっと居続けるわけにも
いけないので助かります」

「……本当は、少し惜しいんじゃない？」

「……まあ、少し……。って、何言わせるんですか！」

「はっはっはっ、達観しているように見えるが、お前もまだまだ子供
供じゃな。では、待ってるぞ」

かくして、目的と住居が出来た俺は、毎日がめつく商売に励んで
いるのである。

スマイル0円で商品を一つでも売りさばき、一日でも早く学園に
入学だ。

「毎度ありがとうございました！」

「……おかしい、傷薬だけ買うつもりが何でこんなに……」

首を傾げながら薬屋を出た冒険者の持っている袋の中には、必要
以上の薬が大量に収められていた。

この世界での薬屋は、正直言って非常に儲かる。

薬草は採取してきた物だし、包装なんて無きにしも非ずだ。

これなら思ったより早く、学園に入学できるかもしれないな。

さて、まずは商売商売。

戦う意思と石の効力

最近、一人になるとしていることがある。

それは、これからの命運を握るであろう戦闘方法を確立することだ。

巨大蟻が現れた時に使った野球の投球フォームは、威力はあるが投げるまでに時間が掛るのが問題だ。

森に薬草を採取しに来たついでに、石を拾って投げ方の研究をしていた。

今日は横投げの練習だ。

素早く走りながら、的目掛けて石を放つ。

ヒュッ

カコンッ

投げた石が当たって、木の切り株に立て掛けたあった薪を飛ばした。

当たったには当たったが、満足できる威力ではない。

「威力がもう少しなければ、実戦では使えそうにないな」

どうにも上手くいかない。

やはり慣れない投げ方だと、どうにも速度も威力も出ないようだ。

「かなり、難しいな……」

ジッと手の中の石に視線を落とした。

今持っているのは男に託された例のビー玉ではなく、ただの拾った石だ。

「礮術ひょうじゆつか……」

愛読していた時代物の小説に書いてあった、石つぶてを投げて戦う技である。

子供になってしまったなりに戦う方法を模索していたが、つい先日ふとした拍子に思い出した。

そういえば愛読していた小説に、石つぶてを投げるキャラクターがいたな……。

主人公の剣豪に従う男は、石つぶてを投げて主人公をサポートする役割を果たしていた。

石の威力が強ければ、当たり所によっては致命傷を与えることになる。

人間相手には言うに及ばず、この間の巨大蟻ですら石で倒れた。礮術を早々に物にしたい。

金がない俺には、武器を買うなんていう選択の余地はない。

何より慣れない剣を振るうよりは、石でもぶつけた方が遥かに威力がありそうだ。

「最終的には、これに頼ることになるんだろうけどな」

視線の先にある木に立てかけた物は、暇を見て自作していたバットもどきだ。

バットだと言うには、まだ不格好過ぎる。

どうにも滑らかにならない表面に悪戦苦闘して出来た物体は、どう見ても棍棒だった。

「使い辛いが、バット代わりにはなるさ……」

そう嘯うそいてみた時、急に森の奥から子供の悲鳴が聞こえてきた。

「きゃー、助けてー！」

「うわあ、こっちに来るなよ！」

声が聞こえてきた瞬間、自然にバットに手が伸びた。

ポケットに石をねじ込んで、悲鳴が聞こえてきた方向に走り出した。

「こっちだ！　こっちに逃げて来い！」

「薬屋のお兄ちゃん！　ガリュウグが！　ガリュウグが来るよ！」

俺の声に気付いて一心不乱に走って来たのは、村の子供のニケとエマの兄妹だ。

やんちゃなニケとじゃじゃ馬のエマは、いつも大人に止められた森へと遊びに行ってしまう。

今日も森に遊びに来ていたのだろう。

ズルズルズルツ

その時、何かを引きずるような音がして、巨大なミミズもどきが現れた。

大体、巨大蟻と同じ位の大きさだが、動きはあまり早くない。

しかし、問題はあの頭部らしき場所についた巨大な口と、体の周りに生えている蔓のような物だ。

これが、ガリュウグか。

あまりにも醜悪で悪夢のような姿に、一瞬だけ視線が釘付けになった。

そんな場合ではないだろう！

自分を叱咤激励して、バットを地面に置いて石を構えた。

俺がガリユウグを前にして石を投げようとすると、突然背後に回った子供たちに服を引かれた。

「危ないよ！ お兄ちゃんも一緒に逃げよう！」

「早くしないと、追いつかれちゃうよ！」

逃げることなど考えられなかった。

俺が逃げれば、世話になった村の人間にも被害が及ぶかもしれない。

なんとか、ここで食い止めなければ。

ガリユウグが前進してくるのを止める為に、素早く野球の投球フォームで石を放った。

置いておいたバットを左手に、石を右手に持ち素早く移動する。命中した石は、ガリユウグの腹を傷つけて怒りの咆哮を上げている。

ギジュジュジュジュツ

怒らせたようだが、どうやら時間稼ぎにはなったようだ。

よし、今の内だ。

そのまま振り向かず、子供たちに村の方向を指差した。

「俺がここで食い止めるから、お前たちは早く逃げろ！」

「でもっ！」

「いいから行け！」

俺が叫ぶと悔しそうな顔で、ニケがエマの手を引いて走り出した。

2人の姿が消えて行く方向に立ちふさがると、蔓をヒュンヒュンと動かし出したガリュウグに向き合った。

最悪だ。

一見蔓みたいなのは、あいつの触手だったのか。

ヒュンッ

「うわっ！」

直感で真横に飛んで正解だった。

すぐ横の地面を、ガリュウグの触手が抉って行った。

「随分とえげつない攻撃をしてくるじゃないか」

地面の抉れた部分を見て、ゾツとした。

素早く後退して、石を構えた。

こいつは油断が出来ない相手だ。

体が動くのは遅いが、触手が伸縮自在な上に攻撃速度が速い。

近付かずに、一定の距離を保って攻撃するしかない。

触手の攻撃に晒されないように、常に動きながら石を放った。

投げた石は何本かの触手にダメージを与えたが、とても致命傷とは言える物ではない。

チッ、やはり付焼刃では、効果が薄いか……。

ヒュンッ

ヒュンヒュンッ

唸りを上げて襲い来る触手を、右に左にステップを踏んで避ける。

避けながらも横投げで石を投げるが、あまり効果がない。

どうにかバットを使いたい所だが、動きを止めればすぐさま触手の攻撃を食らう羽目になる。

不味いな、もう3個しか石がない。

ギシュシュシュシュツ

俺の焦りを感じたように、喜びの声を上げてガリュウグの頭部の口が攻撃してきた。

全身で体当たりするように、頭から俺目掛けてダイブしてきたのだ。

「チツ」

後ろに後退しようとした所を、右からガリュウグの触手で薙ぎ払われた。

「うぐうつ……」

痛みで一瞬息が止まった。

脂汗を流しながら、二打目の直撃を受ける前にヨロヨロと腹を庇って立ち上がった。

これは、本当に不味いな。

もしかしたら、死ぬかもしれない。

死を感じた途端、胸元に吊るした小袋の中から石の発する熱を感じた。

まさか、これはあの時と同じ……。

石が熱を発するのと同時に、ガリュウグの体の末端に緑の光る石が見えた。

「もしや、あの光っている部分が弱点なのか」

巨大蟻を倒した時も、確かあの石を砕いたんだったよな……。しかし、今はバットを使う暇もない。

万事休すか……。

ジリジリと後退した俺は、聞き慣れた声を聞いた。

「ヨシユア君！」

村の方角から走って来たのはプリムだった。

助けが来たなんて喜べない。

散々世話になった彼女を危険に晒すなんて、自分が傷つくよりも嫌だ。

「プリム！ 来るな！」

叫んだ俺を無視して、すぐ横にプリムが並んだ。

「馬鹿か、来るなって言っただろう！？」

「馬鹿は君だよ！ 一人でガリュウグなんて、倒せるわけないんだから！」

ヒュンッ

「この野郎！」

プリムを狙って繰り出された、ガリュウグの触手を怒りに任せてバットで叩き落とした。

ついでに、驚いているプリムに怒鳴った。

「ほらみる！　だから、言ったじゃないか」

自分が攻撃されたことに、プリムは今更ながら顔を青くした。

俺の言葉にはっと気を取り直したプリムは、顔をこわばらせたまま気丈にもガリュウグに向き合って両手を前に突き出した。

「我は汝が友にして、契約せし者なり。大地の精霊よ、今こそその力を示せ『緑の束縛』」

プリムが何かを唱えると、地面から植物の太い蔦が生えてきてガリュウグをグルグル巻きに拘束した。

ガリュウグがどんなに身動きしても、その拘束は外れる様子もない。

「……これが魔法か……」

まさか、この目で魔法を見ることになるなんて思いもしなかった。驚いて目を見開いている俺に、プリムが自慢げに胸を張った。

「えへへ、凄いでしょ？　それでも、私は精霊使いなんだから！」

「へえ、プリムって実は結構凄いなだな」

冒険者だと聞いていたが、精霊使いだなんて思いもしなかった。てっきりこのまま魔法で片が付くかと思ったが、いくら眺めていてもガリュウグが倒れる様子もなかった。

「……で、この魔法はいつガリュウグを倒すんだ？」

「あはは、拘束するだけの魔法なんだから、倒せるわけじゃないじゃない」

何やら額に汗をかいているプリムに肩を竦めると、石を投げ上げてバットを構えた。

カキーンッ

バットで打った石は、のた打ち回るガリュウグの体の末端についていた石に吸い込まれるように当たった。

緑の石が砕け散ると、ガリュウグも徐々にその動きが弱まっていた。

やはり、あの緑の石が弱点だったのか……。

無意識の内に胸元の小袋を押さえる俺に、プリムが呆然とガリュウグの死体を眺めて呟いた。

「凄い！ 精霊魔法で拘束するのがやっとの魔物を、石ひとつで倒しちゃうなんて！」

「まあ、たまたま運良く倒せたただけだ」

「そ、そう？」

プリムは不審に思っているのか、俺の腕をフニフニと押したり持ち上げたりしている。

俺はそのままのプリムにしたいようにさせたままで、さっきの戦闘を反省していた。

やはり、自己流で戦うからには、もっと修行しなければならない。面倒臭いが、プリムや村の人間を危険な目に遭わせたくない。突然、プリムは何かを思い出したように言った。

「あ！ そうだ！ ヨシユア君のことを、ジェーンさんが探してたよ」

「うわっ、採取の途中だった。早く帰らないと」

「うん、じゃあ早く帰ろう!」

採取した物が置いてある所に戻ると、プリムと荷物を集めて村へと歩き出した。

「プリム、ありがとな」

横を歩いているプリムを見ないようにして、さり気なく礼を言った。

「お? お姉さんに感謝の気持ちですか? こら、ちゃんと目を見ていいなさい」

嬉しそうに破顔したプリムは、目を細めて俺に伸しかかって来た。中年のままの俺なら嬉しいんだけど、子供になっている今はただ重いだけです。

「ぐうつ、潰れる……」

「失礼ね! そんなに重くないもん!」

村へと帰るプリムと俺の姿を、木陰からジッと見ている者がいたことをこの時の俺は気付いていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727f/>

命脈の石

2010年10月11日14時34分発行